

適性検査活用の実際

GATB 結果の見方・生かし方(高校生版)

—ワークシート活用について—

日本体育大学女子短期大学助教授

本間啓二

1 ワークシート開発の趣旨

厚生労働省編一般職業適性検査（GATB）は、アメリカ合衆国労働省によって開発されたGeneral Aptitude Test Battery（GATB）を基に日本で昭和27年に開発され、主に中学校・高等学校の職業指導・進路指導のための検査として広く活用されてきた。

GATBは、職業適性に対する理解を深めるとともに職業への理解も深め、個人の職業的発達を促進することで、単に目前に迫った職業の選択決定のための利用にとどまらず、上級学校や職業教育訓練機関に進学することも含めて、将来の職業の探索を行う場合にも有効に活用することができる。しかし、活用の実態を見てみると、その多くは専門高校での就職対策の一環として実施されているのが現状である。

平成10年度に告示された学習指導要領においては、特別活動や総合的な学習の時間をはじめとして、学校教育全体を通して進路指導の充実が掲げられている。各学校での取組みも急速に進められ、進路の学習教材としてもGATBの有効性が認められるようになってきた。しかし、GATBの実施状況は実施後コンピュータ判定を行い、判定用紙を生徒に返却するだけに終わり、判定結果が必ずしも有効に活用されているとは言えない。このようなことから、判定結果を生徒の進路学習の教材として進路適性の理解と職業理解を深めることに役立てることができるように、生徒用ワークシート（GATB 結果の見方・生かし方）の開発に取り組んだ。

2 ワークシートの概要

GATBの判定については、コンピュータ判定のほか自己採点による自己判定も可能である。しかし、実

施時間がそれほど確保できない学校教育の実態を考えると、コンピュータ判定を活用し、その判定結果を使って、生徒自身が自らの職業適性について理解することができるワークシートが有効ではないかと考えた。同時に、進路学習に十分な時間がとれる学校では、自己採点と自己診断を実施する可能性もある。そのため、中学生・高校生版ではコンピュータ判定を基本としながらも自己採点による判定の場合にも同様に実施できるようなワークシートとした。

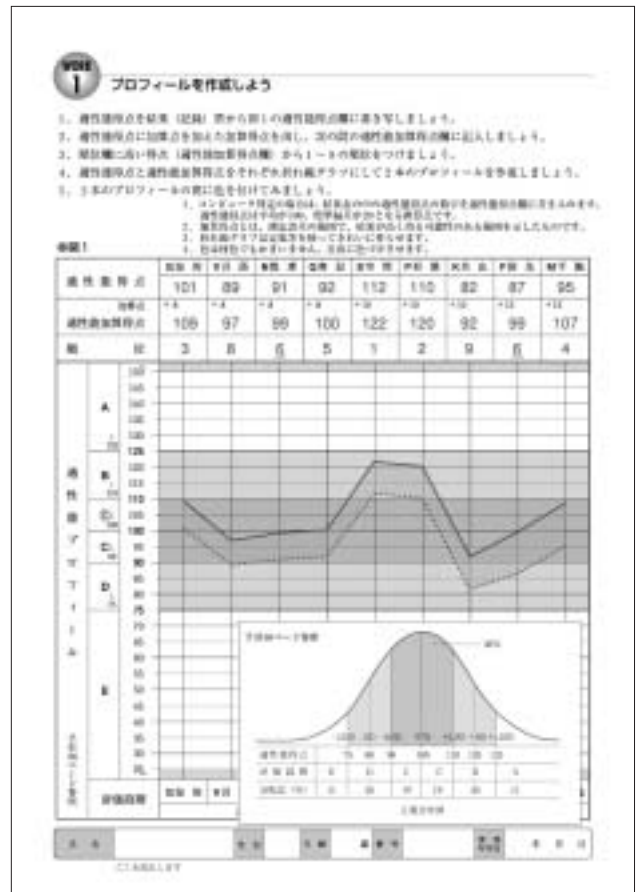
ワークシートによる学習の流れは、表紙の「職業適性を知ろう」を読ませることで職業適性について理解させてから、ワーク1「プロフィールを作成しよう」で、コンピュータ判定結果を使って自分の適性能プロフィールを折れ線グラフで作成させる。ワーク2「自分の適性能を知ろう」では、適性能プロフィールの特徴を理解させるとともに、職業を通して発揮しやすい自らの個性としての高い適性能について記述できるようにする。ワーク3「適性を生かす職業を知ろう」では、適性能プロフィールの上位3位までの適性能を必要とする職業群を選び、その中から興味のある職業を探し出す。つまり、自分の得意な適性能が生かされる職業群を探索し、その中から自分の興味や関心の持てる職業を選び出す作業を行う。

ワークシートでの作業の流れは以上であるが、職業レディネステストなどの職業興味検査を実施している生徒については、さらに、興味検査の結果も踏まえて職業を絞り込むことができる。

3 ワークシートの内容と実施の流れ

(1) 職業適性を知ろう

表紙に書かれている文章を読ませることで職業適性の意味について学び、職業適性の構造について理解さ



せる。職業適性には、「うまくできそうか」という能力的側面と「好きか嫌いか、性格に合っているか」というパーソナリティの側面があり、GATBは能力面のうち基礎的な能力特性をみるものである。その他にパーソナリティ面から職業適性をみるものとして、職業レディネステストやクレペリン作業性格検査などがある。

職業適性は総合的に判断しなければならないが、このワークシートではGATBの結果を使って能力的側面から自分の職業適性を確認していくことを理解させる。
(2) ワーク1「プロフィールを作成しよう」

ここではコンピュータ判定結果を解釈しやすいように、見ただけでわかるような折れ線グラフのプロフィールを作成する。ワーク1の生徒の作業の流れは以下の通りである。

まず、コンピュータ判定の結果表に書かれている適性能得点を図1の適性能得点欄に書き写す。その下に適性能ごとに+8から+12までの加算点が記載されているので、適性能得点に加算点を加えた加算得点を算出し、下の段の適性能加算得点欄に記入する。順位欄に高い適性能得点から1～9位までの順位を付ける。適性能得点をプロフィールに打点し、点線で繋いで折れ線グラフを作る。同様に適性能加算得点を実線で繋

いで折れ線グラフを作り、適性能得点の線との間を色で塗る。色は生徒の好きな色を使わせる。このグラフは平均が100、標準偏差が20となる換算得点であり、半分にすると偏差値と同様になる。このページにも表紙と同様に氏名欄があり、コピーを取って教師の面談や指導用の生徒資料として使うことができる。

(3) ワーク2「自分の適性能を知ろう」

ワーク2では、ワーク1で明らかになった検査結果から、各自の適性能の特徴を理解し、生徒の能力的な自己イメージを形成し、成功しやすい職業を発見することへと結びつけられるようにする。

作業は4項目あり、〈作業1〉として、G 知的能力、V 言語能力、N 数理能力、Q 書記的知覚、S 空間判断力、P 形態知覚、K 運動共応、F 指先の器用さ、M 手先の器用さの9つの適性能の中で最も高く出た適性能はどれか、その名称を書き写させる。同点の場合には同点の項目をすべて書き写す。次に表1を参照しながら、その適性能の働きは認知機能、知覚機能、運動機能のうちどれに当てはまるか判定させる。(GVNQが認知機能、SPが知覚機能、KFMが運動機能に分類される)

次に最も高く出た適性能の具体的な内容について表1「測定された9つの適性能(潜在能力)の解説表」

2 自分の適性を知ろう

1. INKIKIのアンケート(別紙)を完成して、その適性特徴のレポートを作成しよう。

2. その適性特徴のレポートを参考に、自分の職業観や興味のある職業を書き出す。中学生・高校生用ワークシートでは適性得点に基準を設けていないが、指導者用には基準点が記載されている。得点の高さの目安としては、簡易な職業では適性得点が75以上あればよく、90以上あれば多くの職業が適性となる。やや高度な職業では平均の100以上が必要で、職業(探索)領域7は研究や専門的職業であり、部分的に125以上の高度な能力が求められる場合もある。基準点はあくまでも目安や参考として使うためのもので、適性得点の高さによって、すべての領域に適性がなくなってしまったり、すべての領域に適性が出たりすることを配慮して、生徒用ワークシートにはあえて

3. この適性の特徴や興味のある職業を、自分の得意な分野について具体的に書いたところ、(作業4)としてこれらを参考にして自分に向いていると思われる職業とこれまで希望してきた職業をそれぞれに記述させる。

(4) ワーク3「適性を生かす職業を知ろう」

3 適性を生かす職業を知ろう

1. ワークシートで記述した結果を参考に、適性職業群一覧表(別紙)中の「適性欄」の○を付けた職業を選ぼう。

2. 適性職業群の中で適性欄に○を付けた職業群をチェックして書き出す。

3. 適性欄に○を付けた職業群の中から興味や関心のある職業を書き出す。

表2 適性職業群一覧表

適性職業群	適性欄	適性欄	適性欄	適性欄	適性欄
1. 研究・開発	○	○	○	○	○
2. 経営・管理	○	○	○	○	○
3. 技術・工学	○	○	○	○	○
4. 文芸・芸術	○	○	○	○	○
5. 教育・指導	○	○	○	○	○
6. 福祉・社会福祉	○	○	○	○	○
7. 研究・専門	○	○	○	○	○

表3 適性職業群一覧表

適性職業群	適性欄	適性欄	適性欄	適性欄	適性欄
1	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○
7	○	○	○	○	○
8	○	○	○	○	○
9	○	○	○	○	○
10	○	○	○	○	○
11	○	○	○	○	○
12	○	○	○	○	○
13	○	○	○	○	○
14	○	○	○	○	○
15	○	○	○	○	○
16	○	○	○	○	○
17	○	○	○	○	○
18	○	○	○	○	○
19	○	○	○	○	○
20	○	○	○	○	○
21	○	○	○	○	○
22	○	○	○	○	○
23	○	○	○	○	○
24	○	○	○	○	○
25	○	○	○	○	○
26	○	○	○	○	○
27	○	○	○	○	○
28	○	○	○	○	○
29	○	○	○	○	○
30	○	○	○	○	○

の「内容」と「作業の例」を見ながら記述させる。文章例としては「私は立体的、構造的な理解力や図面から実物をイメージする力が最も優れている。作業としては、設計図を理解したり、何かを組み立てることが上手にやれそうである。」が参考として指導者用に赤で記載してある。

〈作業2〉として、2番目や3番目に高く出た適性を記述させる。このときに適性得点が5点以内の同じ程度の適性であれば同じ欄に記載させる。〈作業3〉では、これらの高く出たいくつかの適性を総合して、その特徴を記述させる。文章例としては「私は平面図、立体図の理解力に優れている。文字や数字よりも形のある対象を理解するのが得意なので、設計したり、組み立て作業がうまくやれそうである。新しいアイデアを出す仕事にも向いている。」が参考として指導者用に赤で記載してある。

これまでのプロフィール解釈の作業を通して、自分の適性の特徴を理解し、自分の得意な分野について具体的に書いたところ、〈作業4〉としてこれらを参考にして自分に向いていると思われる職業とこれまで希望してきた職業をそれぞれに記述させる。

(4) ワーク3「適性を生かす職業を知ろう」

ワーク1で自分の職業適性のプロフィールを作成し、ワーク2でそのプロフィールの特徴を解釈してきた。ワーク3では、それらの結果から自分の高い適性能が生かされる職業群を探索する。

まず〈作業1〉では、ワーク1で適性能に順位を付けたが、その上位3位までの適性能を表2「適性職業群一覧表」の中の適性欄にあるGVNQPSPKFMの中から選び○で囲む。〈作業2〉で、適性職業群の中で、適性能に一つでも○が付いた職業群をチェックする。

〈作業3〉では○を付けた適性能の欄の「職業例」の中から興味や関心のある職業を書き出す。中学生・高校生用ワークシートでは適性得点に基準を設けていないが、指導者用には基準点が記載されている。得点の高さの目安としては、簡易な職業では適性得点が75以上あればよく、90以上あれば多くの職業が適性となる。やや高度な職業では平均の100以上が必要で、職業(探索)領域7は研究や専門的職業であり、部分的に125以上の高度な能力が求められる場合もある。基準点はあくまでも目安や参考として使うためのもので、適性得点の高さによって、すべての領域に適性がなくなってしまったり、すべての領域に適性が出たりすることを配慮して、生徒用ワークシートにはあえて

て基準点を掲載しないで、適性能得点の上位3位までを使って生徒の適性職業群を探索するようにした。これは、生徒の可能性をできるだけ幅広く解釈し、生徒の得意な分野が生かせる職業を選択するためのツールとして役立つことを視点においているためである。

(5) ワーク4「VRT、VPIを受けた人のための追加ワーク」

職業レディネステスト(VRT)やVPI職業興味検査を受けた人は、その結果もワーク3に加えることができる。

〈作業1〉では、職業レディネステストのA検査かVPI職業興味検査のプロフィールの得点を参照し、R:現実的領域、I:研究的領域、A:芸術的領域、S:社会的領域、E:企業的領域、C:慣習的領域の6つの興味領域に得点の高い順に番号を付けさせていく。次に上位3位までの記号を○で囲み、さらにVRTは61点以上、VPIは85パーセント以上には◎を付けさせる。

〈作業2〉では、ワーク3の表2「適性職業群一覧表」の「VRT、VPI職業コード」欄にも作業1の結果と同様に上位3つの興味領域に○や◎を付けさせる。

〈作業3〉では、表2「適性職業群一覧表」を見て、「適性能」欄と「VRT、VPI職業コード」欄の両方に○または◎の付いている職業の例から、興味・関心のある職業を書き出させる。

これで、自分の得意な能力としての高い適性能と職業興味の傾向としての高い興味領域得点の両面から自分に合った職業を探索することができる。つまり職業適性を能力的な側面とパーソナリティの側面の両面から考えていくことができるわけである。

最後にワークシートの事後の活動として、「検査結果の考え方と活用の仕方」に、GATBのねらいや結果の活用の仕方について教示してある。教示の概要は以下の通りである。

①検査実施の目的は自分の知らなかった潜在能力の発見や未来の職業人生の可能性を拡大させること。②具体的には職業に必要な9つの適性能の中でよく発達している能力を明らかにし、自己の個性を理解することに役立つ。③検査の結果から高く示された適性能を生かすことのできる職業にはどのようなものがあるか、その可能性を知ることができる。④検査の結果と自分の希望する職業が一致しなかった場合には、教師やカウンセラーに相談すること。⑤自分の個性を生か

せそうな職業が見つかったら、職業ハンドブック、OHBY(職業ハンドブックCD-ROM・中高生版)や職業ビデオなどで調べる。また、その仕事の見学や実際に働いている人に話を聞いたりする。⑥職業や進路の選択は人生全般に関わる重要な事柄であり、教師や家族をはじめとして信頼している身近な人たちとよく相談しながら進路選択を進めるようにする。

4 ワークシート実施の単位時間計画

時間	活動内容	指導上の留意点
開始5分	○学習のねらいと流れについて理解する ○筆記用具等についての確認をする。 ○前時の自己採点表と「結果の見方・生かし方」を配布し、氏名、性別などを記入する。 ○〈職業適性を知ろう〉を読む。	▼学習のねらいや流れについて説明する。 ▼表紙の職業適性について補足説明をする。
展開40分	○〈ワーク1 プロフィールを作成しよう〉(10分間) ① 手順通りに自己採点表から適性能を転記し折れ線グラフを作成する。 ○〈ワーク2 自分の適性能を知ろう〉(15分間) ① 手順通りに進め、プロフィールについての解釈と分析を行う。 ○〈ワーク3 適性を生かす職業を知ろう〉(15分間) ① 手順通りに適性職業群一覧から自分の職業適性にあった職業群を探す。	▼自己採点実施上の注意を補足説明する。 ▼理解できない場合には個別に指導する。
まとめ5分	○氏名等記入欄に必要な事項が記載されているか確認する。 ○自己採点表と「結果の見方・生かし方」を回収する。	▼よく理解できなかったり、生徒自身の予想と結果が違う場合には個別に指導する。

◆事後の活動

- ① 普段の自分への理解とテスト結果からわかった自分像の一致点や違いについて考えてみる。
- ② 自分の適性能が生かされる職業群から興味のある職業について、さらに調べてみる。

5 おわりに

GATBは職業適性を判定する検査として、幅広く活用されてきているが、学校教育の中では残念ながら、判定結果を十分に理解したり、進路選択に活用するまでには至っていない。「結果の見方・生かし方」のワークシートが学習教材としての役割を持ち、「ホームルーム活動」や「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」などキャリア教育に関わる場面において実施されることで、はじめてGATBのもつ役割を達成していくことができるのではないだろうか。

ワークシートの開発に当たっては、生徒一人一人が自らの個性を職業の中で発揮することができるよう、自己探索のツールとして活用されることを願って進めてきた。検査実施以外にワークシートの時間も設定し、進路学習として活用されることを期待する。